失われる世界～ロストパレット～

明兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失われる世界～ロストパレット～

【Ｎコード】
Ｎ７５５９Ｘ

【作者名】
明兎

【あらすじ】
他サイトでも連載していました
突然現れた男に主人公、桜木疾那は世界を救うように頼まれる。
理由もなく、善意もなく疾那はそれを受けるのだが……。
これは疾那が人格を取戻し、世界を救う物語

プロローグ　1

「つまらないな」

少年、桜木疾那はそう呟いた。
その足元には、数人の服を着崩した不良と見られる生徒が倒れていた。
「感心皆無」と四字熟語を貼り付けられている疾那は自分から何一つ危害を加えたりはしない。
勝手に同士討ちした、それぐらいにしか目の前の事態を捉えていなかった。

常になんの目的もなく、ただ感情のままに行動していた。

だからこそのつまらないという発言。
本心と言うより本能。
ただ思ったことを口にしたに過ぎなかった。

「さて、帰るか」

疾那は帰路についた。

疾那の朝は早い。
母親を早くに亡くして、父親もほとんど家にいないからご飯を作るためだ。
朝食も昼の弁当も妹の桜木木香（さくらぎ もか）の分まで作るため、自然と朝は６時に起きることになる。

だが疾那はそれを苦に思ったことはなかった。
だからと言って楽しんでいるわけでもない。
ただなにも感じなかった。
それが当たり前なのだから何を気にする、といった具合だ。

「木香、ご飯だぞ。起きろ」

呼ぶが返事はない。
いつも通りの寝坊だ、別段気にすることでもない。
階段を登り二階の木香の部屋に入る。
この距離で呼んだとしても木香は起きない。
やることは決まっている。

「早く起きろ」

掛け布団を思い切り剥ぎ取る。
簡単な行為だが、一番効果的な行為だ。
それで拠り所を無くした木香は目をさました。

「おっはよー、お兄ちゃん」

寝起きとは思えない屈託のないにこやかな笑顔で木香が言った。
疾那はそれに対して「おお」と無愛想に答えるだけだった。
木香は呆れたように、言葉を口にした。

「まったく相変わらずの無愛想だね〜。妹として私は悲しいよ」

「そうか、それは残念だったな。早く朝御飯食べるぞ」

「もー、少しは反省してよ！」

と言葉は怒りつつも、表情は笑顔のままだった。
結局木香は疾那のことが好きだ。
それはもちろん兄妹としてであって、それ以上ではない。

「おっ、朝から美味しそうなご飯だねえ～」

「どうも、いただきます」

「いただきまーす！」

と言いながら言葉より早くつまみ食いしていたが、疾那は指摘しない。
疾那は注意したところで木香が治さないのは長い付き合いでわかっていた。

口に入れるスピードは早いが、表情はとても上手そうに食べていた。
それだけで美味しそうに食べていることがわかる。
もはや説明も要らないが、疾那は無表情だった。

「じゃあ私は準備して行くね！」

「ああ、気を付けろよ」

と言いつつ疾那は先に家を出るのだった。

学校につくとやかましい声で迎えられる。
疾那はそれを嫌ともいいとも思わない。
ただ無感情で通りすぎる。

「よっ、疾那！　相変わらずやる気ない面してんな！」

「誰かと思えば始乃斗か。おはよう」

疾那とは真反対のテンションで学校を闊歩しているのは、阿原始乃斗だった。
クラスのムードメーカーであり、学校一の問題児でもある始乃斗と何故か疾那は仲が良かった。
まあそれも始乃斗が一方的に話続けているだけなのだが、誰かが困るわけでもないため、誰もなにも言わなかった。

「まったく、お前と話してると一人言ずっと言ってる見たいで嫌になるぜ」

「悪い、気を付ける」

「それ今週でもう１８回目だよ！　で、改善された回数は０だ！」

「本当に申し訳ないと思ってる」

「はいはい、じゃあ飛びきりの笑顔をくれよ」

「こんなのでいいか？」

そう言って、疾那は口の両端を指で吊り上げて、仮面のような笑顔を作った。

それを見て始乃斗は諦めたように笑った。
二人が所属している3年2組へと向かった。
その途中始乃斗は視界の端に嫌なものを見つけた。

「やべ……。疾那、早く教室に」

「ちょっと人助けしてくる」

「手遅れだったか……。はいはい、ここで待っててやるから早く済ませてこいよ」

「ああ、ありがとう」

そう言って疾那は『不良に絡まれている女子生徒』の元へと向かった。

「離してください！」

「お前がぶつかってきたんだろうが！」

「そうだそうだ！　謝れ謝れ！」

「当たったのがどっちかなんてわからないじゃないですが！　そんな下らないことでこんなことするなんて馬鹿馬鹿しいですよ！」

「誰が馬鹿だ！　舐めやがって……オラァ！」

そう言って不良の一人が女生徒に拳を振り上げた。
女生徒が小さい悲鳴をあげたのが廊下を歩いていた生徒の耳に届いた。

だが不良の拳が女生徒に当たった音はしなかった。
代わりに、『疾那の背中に拳が当たる音』が鈍く鳴った。

疾那は小声で女生徒に逃げるように言って、自分の体に当たっている拳を握った。
そしてそのまま、脅迫を口にした。

「逃げるなら許すが、このままここにいたら正当防衛を発動させてもらう」

静かに不良を睨み付けた。
不良は少し物怖じしたが、すぐに威圧的な態度を戻した。
そして足で蹴りを打った。
鈍く疾那の足に当たったが、疾那はまるで痛みを感じさせなかった。
いや、実際に痛みを感じていなかった。

「ああ、折角チャンスをやったのにわざわざ見逃すか」

「て、テメェ何様のつもりだぁああ！」

「あっ、先生こっちです」

「おい、お前ら何をしている！」

「やべっ、教師が来やがった！　逃げるぞ！」

と言って二人は疾那と教師の真似をした始乃斗から逃げ出した。
始乃斗はしてやった、みたいな笑顔で笑っていたが疾那は無表情のまま変えない。

「なんだかんだ言って協力してやる俺もお人好しだよなあ」

「じゃあ俺はなんなんだよ」

「人でなし」

「酷い言われようだな、俺」

と皮肉を言いつつ疾那は笑っていなかった。

放課後、疾那は教室で荷物の準備をしていた。
テスト期間が近いから、教科書とノートを鞄に詰め込んでいた。
他のクラスメイトは部活やらなんやらで教室にはいなかった。
季節は１０月で部活も三年が引退し、新チームで活動を始めている。
それを横目で流しながら帰宅部である疾那は帰路へ向かった。
しかし

「やあ疾那くん。会いたかったですよ」

それは黒で全身を着飾った男によって阻止された。
疾那は身構えず、驚きを隠した。
しかし、あの無感情で無関心な疾那が驚いたのは確かだった。

「誰だお前は？　と言っておくのがいいか？」

「僕の名前はアート。世界の案内人とでも思ってください」

「世界の？　胡散臭い人間だな」

「単刀直入に言います。あなたに世界を救ってほしいのです」

疾那はその言葉に首をかしげた。

世界を救うなんて突拍子もない話しを言われてもただ困るだけだ。

理由を説明するよりも早くアートは口を開いた。

プロローグ　2

「この世界は狙われています。それよりも先に……貴方は魔法や超能力の類を信じていますか？」

「信じないな。そんなものが存在している証拠はあっても根拠がない」

疾那は魔法や超能力、もっと言えば霊やＵＭＡなども信じていなかった。
理由は今、本人が言った通り、根拠がないからだ。
そう言うものがあるのは、わかるがそれはただの偶然に過ぎず、そうでなければトリックでしかない。
どちらにせよ、存在する証拠は残らない。

「貴方が信じていようがいまいが、それは事実なのです。例えば、僕が今こうして人払いの魔法を使っていることとかは根拠になりませんか？」

そうして疾那はやっと気づいた。
今明らかにおかしなことが起こっている。
何故、誰一人生徒がいないのか、それの異質さに気がついた。
部活で新チームが忙しいかもしれない。
だからと言って教室や廊下までこの階層に誰一人がいないのはおかしい。

「異質……だけど根拠にはなり得ないな」

「これを根拠と見ていただけないのなら、根拠を見せることは不

可能でしょうね」

そう言ってアートはクスクスと笑った。
それを見て疾那は静かに鞄の中に入っているあるものに手を伸ばした。

「だからと言って、僕に剣技を使うのは違うと思いますよ」

これも超能力の一部だろうか。
しようと思っていたことを見抜かれて、俺は大人しく定規を手から離した。

疾那は幼少時から剣技を習っていた。
それは家が道場だったのが理由だ。
疾那はかなりのセンスがあり、中学に上がる頃には道場にいる誰よりも強くなっていた。

「まあ、信じなければ話が進まないんだろうからとりあえずは信じるよ」

言葉はしかたなしと言った感じだが、疾那は超能力を信じ始めていた。
目の前で人払いをしているのを確認し思考を読まれた。
それににより、疾那の目の前に気配も音もなく近づいてきたのが最たる理由だ。

「わかっていただけて幸いです」

俺の思考を見透かしたようにアートは笑った。

「で、この世界に何が起こってるって言うんだ？」

「世界は大きく3つに分けられます。まず今僕たちがいる表世界。この世界はいたって普通の世界です」

「へえ」

「そして次が平行異世界。この世界と等しく、平行に違う時間を進む世界です」

「ほう」

「最後が裏世界。表世界と平行異世界とは真逆に位置する世界です。その世界で起こることは、＝で表世界にも影響が及びます。つまり裏世界で地震が起これば、表世界でも地震が起きるわけです」

「うん、それで」

「なんか貴方相手に話していると一人言をいっている気分になりますね」

苦笑いでアートは言った。疾那は笑わなかった。
これ以上は何を言っても無駄と思ったのかアートは話を続ける。

「その裏世界を壊そうとたくらんでいるやつらがいるのです」

「つまり表世界も壊そうとしているわけだ」

「飲み込みが早くて助かります。じゃあそれを止めるために何をすればいいか、そのひとつ目は平行異世界にいる彩人（あやひと）と協力して、

裏世界を守ればいいのです」

「質問する。彩人ってのはなんだ？」

「各平行世界に存在するあなたの人格の一部を引き継いだ存在とでもお思いください。貴方であり貴方ではない、そういう適当な解釈で構いません。僕でさえわからないんですから」

アートはくすくすと笑う。

それに疾那は無愛想に返事をした。

疾那は話を聞いただけである程度事情を把握していた。

特別な感情をいだかない分理解が早いのだろう。

「そしてもう一つは世界を壊そうとする罪人たちをカラーの力を使い封印することです」

「罪人とカラーについて説明を頼む」

「罪人は名の通り、七つの大罪に対応する七つの世界に存在する七人の能力者を指します」

ちなみにさっき説明した彩人も能力を持っていますよ、と続けた。

能力という単語に疾那は眉を潜めるが、すぐにその感情を圧し殺した。

「カラーとは……貴方の人格のことを指します」

「待て、俺の人格だと？　それはどういう意味だ」

「その言葉通りです。貴方は感情と欲が欠落しています。生まれ

る前に貴方の人格は散らばり、平行異世界を作りました」

「待てよ……意味がわからない。なんだよ、それじゃあ俺が原因で世界が破壊されるって言うのかよ」

「まあ極端に言うとそうですね」

当たり前のことを言うように、アートは答える。
思考を切り替えるために疾那は、顎に手を当て状況整理を始めた。
それでもなかなか情報はまとまらない。
すべての発端が自分ということが、思考を邪魔している。

だが冷静に考えれば納得がいった。
今まで無感情で無気力で無関心だった自分はそれが理由だと考えれば理解ができる。
そうか、俺はだから今まで……。

「以上のことを貴方にはしていただきます。拒否権はありません」

「理解はしてないが、断る理由はないな。わかったお前に協力してやる」

「ありがとうございます」

被っていた帽子を取り深々と頭を下げたアート。
疾那は困ったような素振りは見せずに、ただ目的を整理していった。

「一応聞いておくが俺にも能力のようなものはあるのか？それがあれば一番信用できる」

アートは、まだ能力について疑っていたのかと静かに笑う。

「ありますよ、疾風刃来（ストライクブレイド）という能力がね」

「凄いセンスだな」

「……お気に召さなかったのなら変えていただいて結構ですよ」

「別に問題はない」

「そうですか。能力は取り込んだカラーに応じた能力を使用することができる能力です。例えば赤のカラーを取り込んだのなら、力を増幅させるなどですね」

「なんとなくはわかった。今それを証明する術はないんだろ？」

「いえいえ、桜木疾那という人格に対応する能力がありますよ。宙に『空』と書いてみてください」

言われた通りに疾那は宙に『空』と書いた。
すると文字を中心に光が発生し、そこからある物体が出現した。
それは疾那が愛用している、逆刃刀だった。
なれた握り心地に安心感を覚える疾那。

「その状態でもう一度同じ文字を書いてみてください。色彩反応（シグナルパレット）が発動します」

もう一度言われた通りに宙に『空』の文字を書いた。
すると逆刃刀に風の膜が張り付いた。
指先でそれをなぞると、切り傷が作られる。

つまり切れ味を付加したわけだ。

「これで大体のことは理解いただけましたよね？　では早速他の世界に行ってもらいましょうか」

「はあ？　もういくのか。まあ、いいか」

大人しく俺は住み慣れた世界を旅立った。

赤の世界一話　「始まり」

疾那が目を覚ますとそこは木造の建物の中だった。
自分がベットの上で横になっていることに気づくととりあえず起き上がる。

「ここは……どの平行異世界だ？」

疾那がそう思考すると同時に頭にズキリと痛みが走った。
そしてその痛みが何かを思い出したことによる痛みだと気づくのに大した時間はかからなかった。
思い出したのは、この世界の名前。

「そうか、ここは赤の世界か。七つの大罪の暴力に当てられる世界……か」

この世界にも疾那の人格の一部がいるからこそ起こった現象だった。
ちなみにこのとき既に疾那は超常現象を完全に信じていた。
猜疑心も疑心もない疾那には目の前の出来事を現実としかとらえられなかったからだ。

疾那は自分に何が起こっているのかを考えた。
自分が、『偶然ここについたのか』、それとも『どこかに倒れていたのを誰かがここに連れてきたのか』。
後者だった場合それが善意なのか悪意なのかで疾那の運命も変わってくる。

少しの期待を込めドアノブに手をかける。

それを回すとあっさりとドアが開いた。
それで疾那は何者かの善意によってここにいることを理解する。

「怪しい……けど行くしかないよな」

どうせこの世界に俺の場所なんてない、と不感症のまま部屋を出た。
部屋を出てもそこにはただ廊下が続くだけで何もなかった。
精々レイアウトに壺や絵が数枚あるだけだ。

そのまま廊下を歩き、外へと向かう疾那。
外の空気を吸うと受け入れられているのか、拒絶されているのかわからないなんとも言えない心境になる。

「まずはどっちから探すか……。確かカラーってのはペンダントを触らないと取り込めないんだよな」

と、自分に問いかけるとどこからか答が返ってきた。
その答えはイエス、疾那はとりあえず気の向いた方向へ向かうことにした。

ペンダントの在処は本能的にわかるようで、何かを目指して疾那は歩いた。
そして三回目の角を左折したときだった。

「手を挙げて頭の後ろで組んで、膝からしゃがみなさい。でなければ攻撃するわ」

背中に鈍い何かを押し付けられた疾那。
大人しく従うか考えた結果、死にたくはないからとしゃがんだ。

端から見れば異様な構図だった。
制服姿の高校生男子が、同じく制服を着た女子高生にトンファーを押し付けられながら膝をついている。
しかし疾那の顔に恐怖の色はなかった。

「何が目的だ？　金目の物は何一つ持ち合わせてない」

「そんなのじゃないわよ、家の近くに不審者が彷徨いてたから拘束しただけ」

そう言って赤髪の少女は指パッチンを鳴らした。

「だけどよく見たら私がさっき保護してあげた人だったのよね」

「ああ、お前が俺を助けてくれたのか。ありがとう、例を言う」

「感謝されるほどのことはしてないわよ」

赤髪の少女は頼もしい笑みを浮かべた。
拘束を解除され、疾那が少女の方を向き直すとそこには美少女が立っていた。
しかしその可愛さの中にも凛としたかっこよさもあった。
しかしそんな雰囲気にも疾那の心は動かない。
不感症で無感情な疾那に色欲なんてあるはずもなかった。

「まずは自己紹介よね。私は神楽坂雛奈（かぐらざか ひな）」

「俺は桜木疾那だ。よろしく」

二人は手をだし握手を交わした。

「まあお礼をしてくれるって言うなら、ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら？」

「ああ、わかった。で、何をすればいいんだ？」

「ちょっと薪を切ってほしいの」

「薪？　なんだ家を燃やすのか？」

「普通に暖を取るって言えなかったのかしら。しかも冗談ってわからないから真顔で言わないで欲しいわ…」

「違ったのか。まあいいじゃあ薪を持ってきてくれ」

と言うのと同時に疾那は宙に「空」と書いた。
すると宙に木刀が出現する。
それを持ちながらもう一度同じ字を書き、風をまとわせた。
雛奈はそれを見て、目が点になっていた。

「桜木くん……もしかして能力者なの？」

「ああ、そうだ。俺は能力を持っている」

疾那が隠さずに告白したのは、雛奈も能力について知っていると思ったからだ。
知っているなら雛奈は彩人か、それともアートのような存在か、もしくは罪人かのどれかになる。
彩人であるのが一番都合がいいのだが……。

逆に罪人であるのが一番都合が悪い。

「で、雛奈は彩人か罪人どっちだ？」

「私は彩人よ。証拠はないけど信じてもらえるかしら？」

「否定する理由がない。信用しよう」

「ありがとう」

そう言って雛奈は指パッチンを鳴らした。
その笑顔はとても可愛らしいものだったが、疾那が反応するはずもなかった。

「まあ信用する材料として、能力を見せてもらっていいか？　まあ、しょせん確認程度だ、嫌ならしなくてもいい」

「いや見せるわ。私の能力は炎霊（フェアリーテイル）。炎を操る能力よ」

と言って、指を突きだしその先から炎を出した。

「その能力名は自分で考えたのか？」

疾那の言葉を聞いた雛奈は頬を赤く染めた。
そしてぶんぶんと腕を振り、否定を表現した。

「そ、そ、そ、そんなわけないじゃない！」

「なんで頬を赤くしてるんだ？　にしても炎を操る能力か、俺のとは違って大分便利そうだな」

「桜木くんの能力はさっきの木刀を出す能力？」

「まあ半分は正解だ」

疾那は雛奈に自分の能力を説明した。
反応は微妙な感じで、可もなく不可もなくといった様子だ。
ついでに疾那は自分が今しようとしていることを説明した。
やはり同じように雛奈の反応はなんとも言えない感じだ。

「と言うわけで改めて質問だ。一つ、俺に着いてきてくれるか。
もう一つ、カラーについてなにか情報はないか」

疾那は薪を切りながら雛奈に質問を投げ掛けた。
カラーについては知っていればラッキー程度に疾那は思っている。
雛奈は顎に手をあて情報を整理していた。
何を伝えるべきか、何を説明しないべきか、取捨選択をしている。

「そのカラーってのはペンダントの形をしてるのよね？」

「らしいな。俺自身まだみたことないからはっきりしたことは言えないが」

「だとしたら見たことあるわ。私の幼馴染が持っているはずよ」

「それは本当か？」

嘘をつくわけないじゃない、と雛奈は笑顔で答えた。それを疾那は薪を割りながら首を縦に振り肯定を示す。

「無愛想な反応ね。お姉さんつまらないわ」

「そうか、それは悪かった」

「そう言うとこが悪いのよ！」

「すまない」

「だからっ！　もー！　本当調子狂うわね！」

半切れ気味の雛奈に疾那は不思議そうに首をかしげるだけだった。

「まあ、良いわ。あなたの旅に付き合うのは構わない。ただしひとつ条件があるわ」

「聞けるものなら聞こう」

「さっき言っていた幼馴染に起こってる問題を解決してほしいの」

「問題？」

「そうよ、ちょうどペンダントを手に入れたくらいからかしら、その頃からあの子の性格が暴力的になったの。それと私みたいな能力も持っていて……」

「そのぐらいなら構わない。是非ともお前に協力しよう」

「ありがとう。じゃあさっそく問題解決に行きましょうか」

雛奈は相変わらずの俺とは対極的な笑顔でそう言った。

「いや、待て。行くのはもうちょっとしてからにしよう」

「なんでかしら？」

「薪を……全部切ってからにしよう」

「……好きにしなさい」

呆れ顔で雛奈は俯いていた。

赤の世界二話　「進展」

赤の世界のどこか、その廃墟でヴィンセントと呼ばれる少女は暗躍していた。
首にペンダントをしたヴィンセントは、目が赤に染まっており、暴力的なオーラをまとっている。
廃墟には少女以外にも四人の男がいて、その内三人は左目のみが赤く染まっていた。

「ねえ、ファルク」

「なんだ、赤季（あき）」

「ヴィンセントと呼びなさいといってるでしょ！」

「……で、ヴィンセント何か用か？」

「そろそろ雛奈が来そうな気がするの。これもこのペンダントの影響ですかね？」

「なら……私も準備をしておくか」

「私の部下も……この三人なら充分に満足できますよね」

と言いながら、ヴィンセントは三人の方を横目で見た。
そして手招きをすると犬のように、ヴィンセントの元によってくる。
手のひらを差し出すと反射のように手をのせた。

「ファルク、剣の腕はなまってないですよね？」

「希望なら一瞬でお前の首をかっ切ることも可能だが？」

「そこまで言うのなら、私の圧倒支配（テンプテーション）で貴方を支配してもいいのですよ？」

「お前の起動条件に私が引っ掛かるとでも？」

「……冗談ですよ」

ヴィンセントのペンダントの効果により手に入れた能力は雛奈の能力のように万能ではなく、発動条件も発動対象に条件もあった。しかもそれはファルクには知られているため、ヴィンセントがファルクに能力を使うことは出来なかった。

「じゃあ行きましょうか」

「そうだな。あの場所に行くか」

「じゃあ貴方たちも来なさい」

そして五人は、廃墟を出て行った。

「よし、これで終わりか」

疾那はすべての薪を切り終わると、木刀を消してそう言った。
雛奈は壁にかけて寝息をたてている。
何しろ雛奈が話を切り出してから一時間経過しているのだ。

「おい、雛奈。起きろよ」

疾那は雛奈の両肩を揺らした。

うーん、と小さくうめきながら雛奈は目を覚ます。

「あと五分お願い…」

「俺の妹じゃないんだから、早く起きろよ」

「あぐう」

疾那は雛奈にデコピンをして強制的に意識を戻した。

短い悲鳴をあげながら起きた雛奈は外の明るさを見て時間帯を推測する。

そして自分がよだれを垂らして寝ていたことに気がつくと急いで口元を拭った。

「み、見た？」

「何をだ」

「わ、わからないならいいのよっ」

赤くなって否定する雛奈を真顔でみている疾那と言う絵は物凄くシュールだった。

もっともシュールだからと言って誰かが突っ込むわけでもないのだが。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか」

「ああ、そうだな」

と、二人が歩き出した直後だった。
二人の背後に迫る、男の影。
白衣を着て右手にメスを、左手に注射器を持つ姿は異質、いや異常だった。
そしてその異常が狂気を振るった。

ギリギリで気づいた疾那は珍しく防衛の感情をさらし、雛奈を押し飛ばした。

「危ない、雛奈！」

狙われていた雛奈を押し退け、庇った結果疾那の横腹辺りに切り傷がつけられていた。
だが苦痛に表情をゆがめる様子はない。
むしろ、飛ばされた雛奈の方が痛みを感じているくらいだった。

自分の横腹についた傷を指先でなぞり、血をふき取る。
その後疾那は宙に「空」の文字を書き木刀を手に取った。

「疾那、あいつ私の幼馴染の近くにいた人間だわ。だから……」

「わかってる」

「そうよね、よかったわ」

「死なない程度に懲らしめろだろ？」

「違うわよっ！？　気絶させる程度でいいのよ」

「なんだ違うのか。わかった、気絶させる程度だな」

木刀を構え、白衣の男と対峙する疾那。
白衣の男は不気味に、異常に笑う。
疾那は相変わらずの無表情だった。

そして二つの力が同時に動きだす。
白衣の男はポケットから取り出した、薬品のようなものが入ったフラスコを投げ捨て、疾那はまっすぐに走り出す。
投げつけられたフラスコを割らないように丁寧に木刀の柄でいなす疾那。
それに驚いた様子もなく白衣の男は更に四本のフラスコは投げた。

「面倒だな……。こんなときに奥義でも技でも使えたらだいぶ楽なんだろうが」

と、文句を言いながらも疾那は四本すべてを器用にいなした。
それで初めて白衣の男は初めて動揺の色を表情に出す。
おそらくこのフラスコのうち一つでも疾那に効果を及ぼすと思っていたのだろう。
その当てが外れた精神的余裕の欠落は酷いアドバンテージの差になる。

「もう、終わりか？」

疾那は特に意味もなく単純な意味としてその言葉を口にした。
それに白衣の男は更に一歩引き、逃げ腰を取る。

「じゃあ、これで終わりだ」

一瞬。
疾那と白衣の男の間にあった、１０メートルほどの距離はほぼ一瞬で詰められていた。
そして木刀での顎への打撃。
脳を揺さぶることを目的としたその攻撃はクリーンヒットし、気絶させることに成功した。

「終わり、か」

その後疾那は木刀を消して、体にわずかについた砂埃を手で払った。

「桜木くん意外と強いのね」

「疾那でいい。まあ、剣技でなら簡単に負けない自信があるからな」

と言いつつも少し腕が鈍っていたことを少し気にする疾那。
と言ってもそれは他人は気づかない程度の誤差のような違いでしかないのだが。

「にしても、こいつどうしようかしらね」

「お前の知り合いなんだろ？　だったら一つ聞きたいことがある。こいつはいっつもこんなことをするような人間だったのか？」

「私の知り合いじゃなくて、私の幼馴染の知り合い！　そうね、元々はただの研究好きの人だった。けど、間違っても自分から望んで人を襲うような人間じゃなかったわ」

「やっぱりな……。おかしいと思ったんだ、こいつは様子がおかしかった。人を襲う以外に目的がない目をしていたんだ」

「というと？」

「恐らく、こいつは誰かに洗脳されていた」

「洗脳……？」

疾那の言葉に雛奈は怪訝そうに眉を吊り上げた。
いきなり洗脳なんてぶっそうなことを言い出したのだから、そうなるのもある意味自然な反応だ。

しかし雛奈には心当たりもあった。
ここ数か月のヴィンセントの行動には明らかな違和感があり、その周りの人間にもおかしなことが起こっていた。
昔からヴィンセントのおっかけのようなものはいたのだが、それがここ数か月は異常と言えるようになっていたのだ。
それが洗脳が原因とするならば色々と納得がいく。

「でも、赤季は彩人じゃないのよ？　もちろん罪人でもないし」

「一つだけそれ以外でも能力を持つ例がある。カラーに魅入られた場合だ。そうなるとカラーから能力をもらうことになる。そして、性格にも変化が現れる」

「……なるほどね」

その言葉で雛奈の中でもやもやとしていた疑問は解決した。

それと同時に一つの解答も出てきた。

「わかったわ。それはカラーを引き剥がせば助けることができるのよね？」

「正確には俺がカラーを取り込むことで、だがまあおおよそはあってるな」

「そう……。じゃあ、助けに行きましょう」

「ああ、わかった」

雛奈の後を疾那は黙ってついていった。
疾那は背中越しで感じる雛奈の表情に憤りの色を感じていた。
それは誰に対してなのか、何に対してなのかは知りえないのだが。

二人の幼馴染の最後の喧嘩が始まろうとしていた。

赤の世界三話　「突入」

疾那が雛奈につれて来てもらった場所は森だった。
辺りは木ばかりでまさに森といった感じ。
なにもないわけでは森であるため絶対にないが、それでもある意味同じ景色ばかりで飽きそうだった。
視覚情報のゲシュタルト崩壊とでもいうのだろうか。

秘密基地と言われついてきたがそれらしきものはまったく見あたらなかった。
根も葉もあるが姿がまるで見えない。

「おかしいわね……。昔は確かにここにあったのに」

雛奈の目論見ではこの辺にあると思っていたのだろう。
しかしその予想は外れた。
じゃあ秘密基地はどこにあると言うのだろうか。
それを疾那は疑問として口に出す。

「秘密基地は見当たらないのか？」

「う、うるさいわねっ。すぐに見つかるわよ！」

「意地を張るなよ。……だがこの近くにカラーの気配を感じるな」

「カラーの気配……？」

「ああ。カラーは一応俺の一部だからな、なんとなくの気配はわかるんだ」

疾那は気配に神経を澄ました。
すると段々と位置情報が鮮明になっていき、特定が進んでいく。
そして場所が確定した。

「やっぱりこの辺みたいだ。しかもそう遠くない」

「ほら、やっぱり私があってたじゃないの！」

ふふん、とドヤ顔で笑う雛奈。
それを疾那は意外にもスルー。
流石無感情の疾那である。

「でもそれにしてはまったく見えないわね。疾那のそれは本当に合ってるの？」

「俺が方向音痴とでも言いたいのか。　自分の居場所がわからないわけがないだろ」

「そ、そうだけどっ！　そんなにきつく言わなくていいじゃない！」

「別にそんなきつく言ったつもりはないんだが」

疾那との会話がすれ違うのは当たり前のこと。
それが今日初めて会った二人でなら当たり前だ。

「……うん、私の考えすぎだったわ。これからも一緒なんだから仲良くしましょう」

しかしそんなすれ違いを受け居られるのが雛奈だった。
姉御肌でリーダー気質な雛奈は誰よりも人を受け入れる才能に長け、人を認めることが出来る人間だ。
そんな彼女が疾那と一番最初に会った彩人で幸運と言えた。

「ともかくだ。雛奈、この辺の周囲十メートルくらいを燃やせるか？」

「はあっ！？　疾那、知ってるかしらこのデザインでは国有地の森を燃やすことは犯罪なのよ」

「俺のデザインもそうだったからな、よく知っている。もちろんただ燃やすわけじゃない。いや、『燃えるわけがないんだ』」

「どういうことかしら？」

「この辺の草や木はは普通じゃないんだ。見た目ではわからないだろうが、俺たち彩人ならなんとなくその違和感に気付けるはずだ」

疾那に言われ雛奈は大人しくその言葉を確かめるため近くの木を凝視する。
すると雛奈は何かに気付いたらしく口を開く。

「確かに、なんというか薄っすら赤いオーラみたいなものが見えるわね」

「だろ。それは赤のカラーの影響を受けている証拠だ。赤のカラーの影響を受けている物は燃えて広がらずにすぐに燃え尽きる」

「ふんふん、とりあえず燃やしても大丈夫な理由はわかったわ。

で、なんで燃やす必要があるのかしら？」

「まあそれは説明するよりも見てもらった方が早い。とりあえずやってみてくれ」

雛奈は手に小さな火種を乗せ、それに息を吹きかけた。
するとその炎は瞬く間に周囲の草木に広がり、それらを燃やす。
数秒経ったとき、それらは燃え尽きた。

「本当に早く燃え尽きるわね。ってこれは！？」

燃やした草の下から出てきたのは隠し扉だった。

「そうだ、この辺りにあるのに形が見えないのなら理由は一つ。地面の下にあるんだよ」

そう言いながら隠し扉を指さした。
雛奈が扉を開けるとそこには階段があり、うっすらと明かりもついていた。
秘密基地というよりもどちらかというと隠れ家に近いだろう。

「ここからは厳しい戦いになるわよ？」

「だろうな」

「わかってるならよろしい」

そう言ってニヤっと雛奈は笑って階段を降りた。
疾那もそれに黙ってついていった。

階段はそれほど段数はなく、二分ほどで終わった。
階段が終わるとそこには扉があるだけで周りは一面壁。
息が詰まりそうなほ空間だった。

雛奈は疾那とアイコンタクトで「開けた瞬間に襲撃される可能性もあるから油断しないで」と会話した。（当たり前だが疾那はアイコンタクトの内容を理解していない）
勢いよく雛奈はドアを開け両手にトンファーを構えた。
疾那はそれに遅れて宙に「空」の文字を書いて逆刃刀を構えた。

ドアの向こうに広がったのはかなり広い空間だった。
並みの学校の体育館ほどの高さと広さ。
ここが地下とは到底思えない場所だ。

そしてその正面の一番奥には一人の女性とその両脇に三人の男性がいた。
男性のうち二人は俺たちを襲った白衣の男と同じように片目が赤く、女性は両目が赤くなっていた。
雛奈の話を聞く限りあの女性が赤季でありヴィンセントなのだろう。
赤のカラーに魅入られた女性だ。

ヴィンセントに向かい疾那と雛奈は歩く。
そしてお互いの声が届くような距離にまで近づくと雛奈は言葉を発した。

「赤季！」

「私のことはヴィンセントとお呼びください」

「赤」

「ヴィンセントです」

「あ」

「ヴィンセントだと言っているでしょう！」

「「お前らいい加減にしろよ」」

疾那と唯一目が赤に染まっていない男が同時に言う。
お互いの立ち位置は近いようだ。

「まあいいわ。で、ヴィンセント、かしら？　あなたは何がしたいのかしら？」

「もちろん世界の破壊です」

「自分に痛々しい厨二の名前を付けたと思ったら次は世界を壊す？　あなたいつから馬鹿になったのかしら？」

「貧乳のパワー馬鹿に言われたくないですね」

「あなたより頭いいわよ、私。それに、胸の大きい女は大抵馬鹿って決まってるのよ」

「負け惜しみです？」

「こっちのセリフよ」

「早く話を解決しようとしてくれ。そろそろ面倒になってきた」

口ではそうは言っているが、疾那の見た目からはそういう感情は読み取れなかった。
冗談で言っているとかではなく、本気で言っているのだがそれが表情に出ないだけだ。

「単刀直入に言うわ。赤――――ヴィンセント、そのペンダントをよこしなさい」

「答えはノーです。何故渡す必要があるのですか？」

「それが世界を必要するために必要だからよ」

「さっきあなたが言ったセリフを繰り返してあげましょうか？」

「聞かないなら……無理やり聞かせるまでよ？」

「できるものなら」

その言葉を皮切りに二人のにらみ合いが始まった。
地下空間に静寂が広がる。
唾をのむ音、まばたきの音さえも鮮明に響き渡るかのようだった。

その静寂を切り裂いたのは意外にも目の色が染まっていない男だった。
狙いは雛奈ではなく疾那に一直線。
腰から抜いたレイピアを疾那に向けて突き刺した。

「くっ」

それを剣で受けるが、疾那は一方後退した。
そして剣を払い距離を取る。

疾那と男が交戦したのを見て雛奈はヴィンセントに向かって真っすぐ走り始めた。
片目が染まっている二人の男が妨害しようとしたがヴィンセントはそれを片手で制し、疾那の元へ行かせた。
雛奈が振るったトンファは宙を切り、地面を破壊した。

「相変わらずの力ですね。だけど力だけでは私には勝てません」

「勝てないかどうかは私が決めるのよ」

二人の距離はまた離れた。

疾那の元にはレイピアを振るった男に片目が染まった男の三人が集っていた。
三体一である。

「とりあえず礼儀だ、名乗っておくとしよう。俺の名前は黒釣(くろつり)烏(からす)。今は赤……じゃねえか、ヴィンセントに付き合ってる事情でファルクと名乗ってるがな」

「あいつは本当は何をしようとしてるんだ?」

疾那が質問するとファルクは両手を上げ、やれやれという表情を浮かべる。
そして馬鹿にしたような口調で口を開いた。

「まあ話は最後まで聞けよ。で後ろのでかい外人っぽいのがジャ

ック　クリムゾンことサム。ひねくれ者っぽい見た目のやつが伊崎(いざき)
火雀(ひじゃく)ことマルクだ」

「で、お前らの目的はなんなんだ？」

再び質問した疾那に単純に驚くファルク。
驚いた理由は簡単で、悪意も何かを狙ったわけでなく純粋に同じ質問を名乗った直後に言ったからだ。
ファルクはそれに何か気持ち悪いものを感じた。

「お前機械かなんかなのか？　まあ、それは内緒だ。軒並みに俺たちを倒したら教えてやるよ、とでも言っておくぜ」

それを聞いて疾那は軽く剣を一度振り、雛奈を真似たドヤ顔で答えた。

「俺の名前は桜木　疾那だ。さあ、かかってこいよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7559x/

失われる世界～ロストパレット～

2011年10月20日09時13分発行